

天照大神は卑弥呼だった

大平裕著 (PHP研究所・1600円+税)



学界の外にある著者がこれほどまでに精魂こめて古代史に打ち込んできた理由の一つもそこにあるのであろう。

本書は大平古代史の6冊目の著作であり、総集編とも呼ぶべき入魂の作品である。大平古代史は、血の通う人間の抗争と和解のドラマであり、臨場感をもって時代を彷彿させる筆法をその特徴とする。

筆法を支えるものが、古事記、日本書紀、魏志倭人伝に記録される各地への頻繁な踏査である。著者は、卑弥呼が天照大神に他ならないことを立証し、次いで大神による全国統一の過程を精細に描く。

天照大神の大和政権が出雲国に威を張る大國主命王朝を打倒。命の鎮魂のため出雲大社を造営、みずからの子孫を大社の斎主とさせた。著者はこれを国造りの第一段階とし、第二段階を九州平定に求める。書紀では天孫降臨の地は高千穂とされているが、史

実は大和からの「天孫西征」である。すでに大和の傘下にあった北九州の博多に上陸、戦いの相手は大和に唯一服従しない狗奴国(肥後)だった。戦いは予想外の苦戦を強いられ(日向三代)、南下を余儀なくされるものの、薩摩、大隅、日向にも支配圏を拡張。その間に西征で主力を欠く大和では天照大神が死去、これに乗じて饒速日命が反乱。社稷の急で日向から神武東征に向かい、大和で激戦の末、神武天皇即位となる。

こうして読者は、神武以来はもとより、神武以前からの天皇史の連続性を確たるものとして認識できるのである。

評・渡辺利夫

(拓殖大学学事顧問)

日本国憲法では「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴である」。それはそうだが、天皇は、連綿とつづく日本の歴史の「連続性」の象徴であることが加えられねばならない。欧州やユーラシア大陸において、天子とか帝王とか皇帝などと呼ばれる権力者の交代は実に頻繁であり、日本の天皇家のような「万世一系」は他に例がない。

日本人は民族の途切れることなくつづく歴史を天皇家の踏査で導く全国統一の過程